

日本によってアジアのありかたが、一変した。

対日協力者は民族の功労者

今日の日本では、日本が前大戦中にアジアを侵略したために、嫌われているというが、事実にはまったく反している。

日本の敗戦後、中国では戦時中に日本に協力した南京政権の幹部をはじめ、数千人の中国人が「漢奸」として裁判にかけられ、処刑された。

しかし、東南アジアからインドにいたるまで、大戦中に日本に協力した人々が裁判にかけられたことは一度としてないし、ましてや処刑など論外だ。

日本が侵略して、恨みをかっていたとしたら、このようなことはありえない。インドネシアでも、インドも、ミャンマーでも、戦後、対日協力者は民族の功労者となった。

フィリピンでは、初代のラウレル大統領の長男が、戦争中に日本の士官学校で学んだが、戦後、駐日大使となった。アキノ大統領の一家が、対日協力者だったというように、どの国をとっても、このような例は枚挙にいとまがない。

第五章 白人による人種差別からの解放

人種差別に対する昭和天皇の想い

アメリカにおける日本人蔑視と差別は、それはひどいものだった。

大正十三（一九二四）年に、アメリカ上下院が排日移民法を立法した。

日本人移民は不動産を所有することも、住居の賃貸契約を結ぶことも、許されなかった。日本人移民の子は、公立学校から締め出された。

それまでカリフォルニア州において、日本人移民の排斥運動が行われていたものの、排日移民法は、日本国民にとってあまりにも屈辱的なものだった。そのために、国民を悲憤慷慨させた。

新渡戸稲造は有名な『武士道』の著者であり、ウィリアム・クラークの札幌農業校で学んだうえ、青年期にアメリカに留学して、一九二〇年から国際連盟事務次長をつとめたが、アメリカにおける排日運動によって、強い衝撃を受けて、「私は二度とアメリカの地を踏まない」と、宣言した。

昭和天皇は敗戦の翌年に、側近者に対して対米戦争をもたらした原因について、つぎのように述べられている。

「この原因を尋ねれば、遠く第一次世界大戦後の平和条約の内容に伏在してゐる。（大正

八（一九一九）年のパリ講和会議において）日本の主張した人種平等案は列国の容認する処とならず、黄白の差別感^{とら}は依然残存し加（カリフォルニア）州移民拒否の如きは、日本国民を憤慨させるに充分なものであった。

かゝる国民的憤慨を背景として、一度、軍が立ち上つた時に、之を抑へることは容易な業ではない。（『昭和天皇独白録』）

平成十二（二〇〇〇）年に、拓殖大学が創立百周年を祝った。拓殖大学は明治三十三（一九〇〇）年に、海外で開拓に当たる人材を育成するために、台湾協会学校として創立された。

今上天皇が、記念式典に臨席された。その時のお言葉のなかで、「校歌には青年の海外雄飛の志とともに、『人種の色と地の境 我が立つ前に差別なし』と、うたわれています。当時、多くの学生が、この思いを胸に未知の世界へと、大学を後にしたことと、思われま

す」と、述べられた。

父・昭和天皇の想いを、語られたにちがいない。

自存自衛とアジア解放

日本は前大戦を、アメリカによって圧迫され、追い詰められて、自存自衛のために戦った。

だが、アジアを西洋の植民地支配から解放することを、目的としたのではなかった。アジア解放は開戦後に戦争目的として、加えられた。

対米戦争の開戦の詔勅は、「事既^き二此^{こゝ}ニ至ル帝国ハ今ヤ自存自衛ノ為^{ため}蹶^{けつ}然^{ぜん}（勢いよく）起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ」と述べ、天皇が「豈^{あに}（けつして）朕カ（私の）志^{こころざし}ナラムヤ」と、嘆かれています。アメリカの理不尽な圧迫に耐えられず、自存自衛のために、立ち上がったのだった。

詔勅は自衛のために決起したものの、「東亜永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝国（日本）ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス」と、結ばれている。

アジアを解放することによって、アジアに恒久的な平和を確立することを、願ったものだった。

日本の多くの青年たちが、アジア解放の大義を信じて、戦野に果てていった。日本が大きな犠牲を払うことによって、アジアだけではなく、アフリカの諸民族も解放された。

大戦後、この高波がアフリカ大陸を洗って、アフリカ諸民族がつつきと、独立を獲得していった。

国際法の權威も「東京裁判は違法」

アメリカが占領下で行った東京裁判では、十一人の判事のうち、インドのパール判事だけではなく、オランダのベルナード・V.A・レーリング判事、フランスのアンリ・ベルナル判事の三人が、多数意見に反対する判決書を提出した。

三人の判決書は、日本が占領下にあったから、日本国内で報道されることがなかった。レーリングは、後に国際法の世界的な權威として知られるようになったが、晩年に回顧録でもある『東京裁判とその後』^{ザ・トキョウ・サイバイン・アクト・ビhind}を発表している。

そのなかで、東京裁判が違法なものだったと断定して、「人種差別が、太平洋戦争の主因の一つだった。連合国の国民は、日本人を人間以下とみなすように、教育されていた。広島、長崎で数十万人を、一瞬のうちに焼殺したのも、人間ではないと感じたから、できたのだった。

私たちは滞日中、東京をはじめとする都市を爆撃して、市民を大量に焼殺したことが、

念頭を離れなかった。私たちは国際法を擁護するために、裁判をしていたはずなのに、連合国が国際法を徹底的に踏み躪ったことを、毎日、見せつけられていたから、それはひどいものだった。

もちろん、勝者が敗者を裁くことは不可能だった。まさに、復讐劇だった」と、述べている。

そして、「日本は先の戦争を、アジアをアジア人の手に取り戻すために、戦った。しかし、日本は軍事力を用いて、アジアから西洋の植民地勢力を駆逐する意図は、もたなかった。日本の当時の軍事力は、防衛的な性格のものであった」といって、戦争に至った経緯を、詳しく説明している。

百六十四の独立国が誕生

私は昭和天皇が崩御されて、大喪の礼が催された時に、テレビ中継を見ながら、涙が込みあげるのを抑えられなかった。天皇は長寿を全うされたから、天皇の崩御を悲しんだからではなかった。

百六十四ヶ国の元首や、代表が、全世界から弔問に訪れたという解説が、テレビから流

れてくるのを聞いて、日本にとって昭和が何と偉大な時代だったのか、という思いにとらわれた。

百六十四ヶ国もの独立国が誕生したのは、日本が先の大戦を国をあげて戦ったからだ。アジア・アフリカの諸民族が解放されて、いっせいに独立した。

私は国産みの神が日本を産んだために身を焼いて、黄泉の国へ旅立ったという、日本神話の伝説を思った。先の大戦に散った何百何十万柱の神々のもとに、参じられたのだという思いが、脳裏を横切った。

もし、日本が日露戦争に勝つことなく、先の大戦を大きな犠牲を払って戦うことがなかったとしたら、アジア・アフリカの諸民族が、今日でも白人の植民地支配のもとで苦しんでいたことだった。

明治大帝の御葬儀には、十数ヶ国しか、弔問の使節を派遣しなかった。大正天皇の時代に、日本はすでに西洋に伍する主要国となっていたが、大喪の礼に弔問使を送ったのは、三十数ヶ国しかなかったのだ。

アジア・アフリカのほぼ全域が、白人の支配のもとで喘いでいたから、独立国の数が少なかった。

『昭和天皇実録』によれば、開戦の翌日の昭和十六年十二月九日の項に、「宣戦につき親告の儀を行われる。午前九時四十五分、内苑門を発御、賢所・皇靈殿・神殿において御拝礼になり、左の御告文を奏される」と記されている。

御告文は現代語に訳すると、「朕（私）は歴代天皇の教えに従って『四海皆同胞』を願ひ、諸国と睦（むつ）び親（か）しもうと努力してきたが、ついにわが国の存立さえ危ういことになった。はなはだ残念でならないが、今度米英両国と戦争を始めることになった」というものだった。

賢所、皇靈殿、神殿は、皇居の構内にあつて、天照大御神、歴代の天皇の霊、全国の神々が、それぞれ祀（まつ）られてゐる。

日本では拓殖大学の校歌にうたわれているように、歴史を通じて人種差別が行われたことがなかった。「四海皆同胞」と「八紘（はっこう）一宇（いちう）」（世界を一つの家にする）こそ、歴代の天皇に伝えられた教えであつた。

ところが、国会議員も、「八紘一宇」という言葉を口にするのが、はばかられる。

広辞苑で「八紘一宇」という言葉をひくと、『宇』は屋根の意。世界を一つの家とすること。太平洋戦争期、日本の海外進出を正当化するために用いた標語。日本書紀の『六合

（くにのうち）を兼ねて都を開き、八紘（あめのした）を掩（おほ）いて宇（いへ）にせむ』に基づく」と、説明されている。

差別なき日本の統治

日本は第一次大戦を連合国に加わつて戦つて戦勝国となつたことから、大正九（一九二〇）年から、西太平洋のサイパン、テナアン、ペリリューなどのマリアナ諸島とマーシャル諸島とパラオ諸島を、国際連盟の委任統治領として統治した。マリアナ、マーシャル、パラオ諸島は、十六世紀からスペインの領土となり、その後、ドイツへ割譲されていた。日本が先の大戦に敗れると、アメリカの委任統治領となつた。

日本の統治は二十数年でしかなかったが、島民は今日でも日本を慕っている。白人による統治と違って、日本統治は島民を差別することなく、教育や、民生の向上に努めたからだった。

今日でこそ、人種平等が全世界にわたつて常識となつているが、日本が先の大戦を戦つたことによつてもたらされた。

かりに、日本が先の大戦に勝つたとしても、アジア諸国から恣（ほしいまま）に収奪することはなか

つたはずである。

これは、日本の台湾、朝鮮統治が証している。

西洋諸国による植民地統治が、宗主国による一方的な搾取だったのに対して、日本統治は前近代的な水準にあった台湾と朝鮮を、短期間のうちに近代世界に引き上げた。

日本は台湾と朝鮮において民生と、教育の向上をはかり、学校、病院、鉄道を普及させ、治水、灌漑を整備して、農工業を振興した。日本本国から、巨額にのぼる資金を、注ぎ込んだ。

日本は台湾と朝鮮に、最高学府である台北帝国大学と、京城帝国大学をつくったが、西洋諸国は植民地に、大学を一つもつくることがなかった。

朝鮮は腐敗した李朝のもとで、停滞しきっていた。日本が日清戦争に勝って、はじめて大韓帝国として独立させるまで、中国の属国だった。そのために、政治文化が中国的なものによって蝕まれていた。

朴正熙大統領は「わが五千年の歴史は、一言でいって、退嬰と沈滞の連鎖史であった。わが民族史を考察してみると、情けないというほかない」（『朴正熙大統領選集』）と、嘆いている。

全斗煥大統領も、一九八一年の光復節（独立記念日）の演説のなかで、「国を失った民族の恥辱について、日本を責めるべきでなく、当時の情勢、国内的な団結の欠如、国力の弱さなど、自らの責任を厳しく自責しなければならぬ」と、説いた。

韓国と台湾の目覚ましい発展は、日本統治のもとで、中国の軛から脱することができたからだった。

もし、韓国が中国の属国であり続けたら、今日でも中国大陸の水準にあつたらうし、ロシアの植民地になつていたら、中央アジアの旧ソ連共和国と似たような水準にあることだろう。

協力的だった日本統治下の朝鮮人

私たちは日本統治下の韓国民が、先の大戦に当たって日本国民として、積極的に協力してくれたことを、忘れてはなるまい。

日本統治下の朝鮮では、十三道の長官のうち韓国人が六人、その下の二百十八郡の郡守の大部分が韓国人だった。日本統治下の韓国は、人口と面積当たりの警察官の数が、台湾、樺太、関東州と比較して、はるかに少なかった。

日本軍で多くの朝鮮人が将官、あるいは高級将校として、日本人将兵を指揮した。韓国人のなかで、軍人に対して授けられる最高勲章である金鷄勲章きんけいしんしょうを授けられた者も多い。

アメリカや、ヨーロッパの植民地では、現地人の将校が、白人兵の上に立って指揮するようなことは、まったく考えられなかった。

昭和十三（一九三八）年に、朝鮮で陸軍志願兵制度が設けられると、応募者が殺到し、三年後には採用員数に対して、四十五倍の倍率となった。翌年、海軍に志願できるようにになると、競争率が六十二倍を超えた。もし、日本の統治が苛酷なものだったら、そこまで協力しなかっただろう。

昭和十四（一九三九）年に、創氏改名が許された。朝鮮では八割以上が競って改姓名したが、台湾では二%に留まった。

今日、韓国では日本統治下で日本名に改めることを強制され、名を奪われたと教えられているが、事実ではない。朝鮮王族も、将官や、高級将校だった朝鮮人は、朝鮮名を名乗り続けた。

今日、日本のなかでも、日本が台湾、朝鮮統治について謝罪を続けるべきだと主張する者がいるが、中国がチベット、新疆ウイグルしんきんウイグル、外モンゴルに対して行っている、苛酷な植

民地統治を非難しようとするのは、なぜか。

日本では、朝鮮人に対して人種差別が行われなかった。昭和七（一九三二）年に、朴春琴パクチュンが朝鮮名で東京府第四区（現江東区）から、衆議院議員選挙に立候補して、二期当選している。有権者のほとんどが、日本人だった。

朴春琴が初当選した時の写真を見ると、多くの和服姿の女性に囲まれて、万歳を唱えている。戦後、大韓民国民団の顧問をつとめている。

たしかに、日本の下層階級の人々のあいだでは、朝鮮人に対する蔑視と差別があった。朝鮮半島からきた人々が、仕事を奪ったからだだった。

アメリカでは一九八〇年代後半、黒人街で暴動が起るたびに、黒人が韓国人コリアンの店舗を襲撃した。韓国系移民が黒人の低賃金の仕事を奪って、韓国街をひろげていったからだだった。韓国系移民が増える以前は、同じ理由からユダヤ人が黒人の標的となった。

もし、日本が先の大戦に引きずり込まれていなかったら、日本による台湾、朝鮮経営の評価は、大いに異なっていたことだろう。

白人にとってのインデアン

日本は明治三十七（一九〇四）年に、白人の大帝国であったロシアと戦って、日露戦争に勝った。有色人種でも白人を打ち負かすことができることと示したことによって、世界の有色民族を覚醒させた。

アメリカは十七世紀はじめの一六二〇年、迫害を逃れてイギリスから、大西洋を渡って東海岸に上陸した清教徒によって築かれた。

アメリカの建国者たちは、北アメリカの大自然を、神が自分たちに与え給うたものとして、何でも手当り次第に使った。原住民のインデアンは、動物とかわらないとみられて、殺戮されていった。

神から与えられた新天地であったから、土地であれ、原住民の生命であれ、何であれ、すべて恣に奪った。原住民は人の形をしていたものの、動植物の一部でしかなかった。

イギリスの有名な著述家として知られる、セシル・チェスタートン（一八七九―一九一八年）は、『合衆国の歴史』のなかで、新大陸に上陸した白人にとって、「インデアンはでるかぎり早く、駆除すべき害虫と変わらなかつた」と、述べている。

『大英百科事典』として知られる『ブリタニカ国際大百科事典』は、北アメリカ大陸の

「十三植民地の形成と発展」が、「先住民インディアンの『清掃』と、アフリカ人奴隷の『植民』を、前提として行われた」と、述べている。

アメリカの研究によると、清教徒が東海岸に到着した時に、北アメリカ大陸に三百万人のインデアンがいたが、十九世紀に入った時点で三十万人にまで減っていた。

アメリカでは白人が入植した当初から、黒人奴隷を使役していたが、一八六三年に奴隷解放宣言が発せられるまで、七百万人以上の黒人奴隷がアフリカから拉致されて酷使されたと、推定されている。

インデアンは従順でなかつたから、奴隷として適さなかつた。黒人は牛や馬よりも、安価に輸送することができたし、牛馬より寿命が長かつた。

馬房に押し込められる日系アメリカ人

真珠湾が攻撃されて戦争が始まると、一片の大統領行政命令によって、十二万人以上のほるアメリカ国籍を持つ日系アメリカ人が、敵性国人として、エキシミネー・エイリアンそれまで汗水流して築いた財産をすべて没収されたうえで、身の回りのものだけ持つことを許されて、全米の十ヶ所の僻地に設けられた強制収容所に、送り込まれた。

これは、アメリカ憲法に対する重大な違反だった。同じ敵国の血をうけた、ドイツ系、イタリア系などのアメリカ人は、まったく収容されることがなかった。

収容所は有刺鉄線によって、囲まれていた。馬小屋や、急拵きゅうごしらえの掘立て小屋が並び、衛生も、環境も劣悪だった。サーチライトを備えた監視塔の上から、常時、銃を携もえた兵士が監視していた。

歴史学者として著名な、マサチューセッツ工科大学（MIT）のジョン・ダワー教授は、著書『ハートランド・アメリカの歴史容赦なき戦争・太平洋戦争における人種差別』（平凡社）のなかで、日系アメリカ人が収容された施設について、こう描写している。

「日系アメリカ人は西海岸の自宅や、コミュニティから追い立てられ、牛のように駆り集められただけではなく、強制収容所の最終的な宿舎に移住させられるまで、何週間も、何ヶ月も、動物用の施設で暮らすような命じられたのである。

ワシントン州では二千人の日系アメリカ人が、ポートランドの家畜置場にある唯一の汚い建物に詰め込まれ、わらを詰めた麻袋の上で寝た。カリフォルニア州ではサンタアニタ、タンフォロンといった競馬場の厩舎の中の馬房に、押し込められた。サンタアニタの集結センターは、結局八千五百人の日系アメリカ人の住居にあてられたが、馬の引越ひきこしと、

最初の日系アメリカ人の到着との間には、四日しかなかった。

その唯一の入浴設備は、馬用のシャワーであり、厩肥の悪臭がいつまでも漂っていた。ほかの疎開者たちも、はじめ各地の馬小屋や牛舎に入れられた。ワシントン州のピュヤラップ集結センター（キャンプ・ハーモニーと呼ばれた）では、豚の檻おびに入れられた」

人間扱いされなかった日本兵

アメリカのほとんどの白人が日本人を蔑視していたから、同じ人間として見ていなかった。そこで、日本人兵士を戦場において人間と、見なかった。

チャールズ・リンドバーグは、一九二七年に単機を駆って、はじめて大西洋を横断したことによって、アメリカの国民的英雄となった。

リンドバーグは前大戦に当たって志願して、太平洋戦線で、大佐として戦ったが、克明な日記をのこしている。

「軍曹は撃つべき日本兵を見つけられなかったが、偵察隊は一人の日本兵を捕虜にした。今こそ、日本兵を殺すチャンスだと、その捕虜は軍曹の前に、引き立てられた。

「しかし、俺はこいつを殺せないよ！ やつは捕虜なんだ。無抵抗だ」

「ちえつ、戦争だぜ。野郎の殺し方を教えてやらあ」

偵察隊の一人が、日本兵に煙草と火を与えた。煙草を吸い始めた途端に、日本兵の頭部に腕が巻きつき、喉元が「一方の耳元から片方の耳元まで、切り裂かれた」のだった。

このやり方は、話をしてくれた將軍の、全面的な是認を受けていた。私はそのやり方に反対すると、侮蔑と、哀れみの態度に接した。『やつらを扱った一つの方法さ』

談たまたま捕虜のこと、日本軍將兵の捕虜が少ないという点に及ぶ。『捕虜にしたければ、いくらでも捕虜にすることが出来る』と、將校の一人が答えた。『ところが、わが方の連中は、捕虜をとりたがらないのだ』

『二千人ぐらい捕虜にした。しかし、本部に引き立てられたのは、たった百か、二百だった。残りの連中には、ちよつとした出来事があった。もし、戦友が飛行場に連れて行かれ、機関銃の乱射を受けたと聞いたら、投降を奨励することにはならんだろう』

『両手を挙げて出て来たのに、撃ち殺されたのではね』と、別の將校が調子を合わせる』

(一九四四年六月二十六日)

「わが將兵の態度に、深い衝撃を覚えた。敵兵の死や勇氣に対しても、また、一般的な人間生活の品位に対しても、敬意を払うという心を持ち合せておらぬ。日本兵の死体から略

奪したり、略奪の最中に、死者を サンクツアピツチ 野郎^シ 呼ばわりしたりすることも、意に介さぬ。ある議論の最中に、私は意見を述べた。「日本兵が何をしでかそうと、われわれがもし拷問をもって彼らを死に至らしめれば、われわれは得るところが何一つ無いし、また、文明の代表者と主張することさえ、出来ない」と。

『ま、なかには、やつらの齒をもぎとる兵もいますよ。しかし、大抵はまずやつらを殺してから、それをやっていますね』と、將校の一人が言い訳がましく、言った(六月二十八日)

「わが軍の將兵は、日本軍の捕虜や、投降者を射殺することしか、念頭にない。日本人を動物以下に取り扱い、それらの行為が、大方から大目に見られているのである。われわれは文明のために、戦っているのだと、主張されている。ところが、南太平洋における戦争を、この眼で見れば見るほど、われわれには文明人を主張せねばならぬ理由が、いよいよ無くなるように思う」(七月十五日)

「心底で望んだとしても、敢えて投降しようとはしない、両手を挙げて洞窟から出ても、アメリカ兵が見つげ次第、射殺するであろうことは、火を見るよりも明らかなのだから」(七月二十一日) (『孤高の鷲ーリンドバーグ第二次大戦参戦記』、学研M文庫)

アメリカの従軍記者は、一九四六年の『アトランティック・マスリー』誌に、太平洋戦線で「われわれは捕虜を見境なく撃ち殺し、野戦病院を攻撃し、救命ボートに機銃掃射を加え、民間人を殺害した。日本兵の頭蓋骨を煮て、置き物や、骨からペーパーナイフをつくった」(エドガー・ジョーンズ)と、寄稿している。

アメリカの人気作家のウィリアム・マンチェスターも、著書『回想 太平洋戦争』(コンパニオン出版)のなかで、「投降した日本兵は無防備だったが、一列に並ばせて、軽機関銃で掃射して、一人のこらず射殺した」と、述べている。

先のダワー教授は著書のなかで、「捕えた日本兵を一人放ち、狂ったように駆け出して逃げるところを、銃の標的として楽しんだり、沖縄で恐れおののく老女を撃ち殺して、『みじめな生活から、自由にしてやった』と自慢した」という。

イギリスの歴史作家のマックス・ヘイスティングスは沖縄における、アメリカ兵による残虐行為を、つぎのように描いている。

「一般住民がさまよう戦場では、身の毛がよだつようなことが起った。とくに、沖縄戦がそうだった。

(アメリカ軍兵士の)クリス・ドナーは、こう記録している。

「地面に十五歳か、十六歳と思われる、美しい少女の死体が横たわっていた。全裸でうつぶせになって、両腕を大きく拡げていたが、やはり両脚を開いて、膝から曲げてあがっていた。

仰向けると、少女の左乳房を銃弾が貫いていたが、何回にもわたって強姦されていた。日本兵の仕業であるはずがなかった」

しばらく後に、ドナーの分隊の何人かが、丘の上から、敵によって狙撃されて倒れた。その直後だった。赤児を抱きしめている日本女性に、遭遇した。

兵たちが口々に、『あのビッチ(女)を撃て! ジャップ・ウーマンを殺せ!』と、叫んだ。

兵がいつせいに射撃した。女は倒れたが、渾身の力を振り絞って立ち上がると、手離した赤児のほうへ、わが子の名を叫びつつ、よろめきながら進んだ。

兵たちは、さらに銃弾を浴びせた。女が動かなくなった」(『ネメシス 日本との戦い 一九四四―四五年』、ハーバース・プレス社、ロンドン)

「ネメシス」はギリシャ神話のなかに登場する、復讐、あるいは天罰を降す女神である。日本兵はこのような残虐行為を、働かなかった。日本は歴史を通じて人種差別を行った

ことも、都市ごと大量虐殺を行うこともなかったし、奴隷制度も存在しなかった。

このような証言は、この他にもいくらかもある。先の大戦中、アメリカ人を「米鬼」と呼んだが、まさに鬼だった。

トルーマンもマッカーサーも人種差別主義者

ルーズベルトが死去したのを受けて、大統領となったトルーマンも、激しい人種差別主義者だった。

トルーマンは林訥（ぼくろう）で、口汚かった。広島、長崎に原爆を投下することを決定した時に、側近に「動物は動物として扱うべきだ」と、語った。そして、日本が降伏した直後に、日本人は「悪辣で、残忍な野蛮人だ」と、いつている。

トルーマンは、黒人だけでなく、ユダヤ人も嫌った。トルーマンはユダヤ人と黒人をミズーリ州の自宅の玄関先にも入れたことがないことを、自慢した。

一九四六（昭和二十一年）年に、閣議の席上でユダヤ人をけなして、「イエス・キリストが彼ら（ユダヤ人）を満足させることができなかったのに、どうして私がそうできようか」と、発言している。

マッカーサー元帥も、人種差別主義者だった。

東京時代を通じて高級副官だったファビアン・パワーズ少佐が、専用車に同乗していた時に、外に小雨がしのついていた。

マッカーサーはパワーズに、「昔、東京に来た時も、このように雨が降っていた。ジャップは、おぞましい悪そのものだ」と、いった。

日露戦争末期の一九〇五年に、マッカーサーは観戦武官として満州を訪れた父親に連れられて、日本に短期間滞在したことがあった。

また、マッカーサーはルーズベルト大統領を、嫌っていた。側近たちに、ルーズベルトがユダヤ人だといって、名をわざと間違えて、「ローゼンバーグ」と呼んだ。トルーマンについても、「あの卑しい顔を見れば、ユダヤ人に間違いない」といった。だが、ルーズベルトも、トルーマンも、ユダヤ人ではない。

もっとも、ルーズベルト大統領のほうも、マッカーサーを嫌って、『フーパー回想録』によると、わざと名前を「マクレランド」と間違えてみせて、「どうしようもない問題児」と、呼んでいた。

「日本民族を絶滅させるべきか」という質問

一九四四（昭和十九）年のアメリカは、日本に対する激しい憎しみによって、沸き立っていた。

この年のギャラップ社の世論調査では、回答者の十三パーセントが、「日本民族を絶滅させる」ことを、支持していた。はじめから、「日本民族を絶滅させるべきか」という質問が、用意されていたのだった。

このころに、ルーズベルト大統領はスミソニアン研究所で働く、文化人類学者のアール・ヒルデリカをホワイトハウスに招いて、「日本人全員を、温和な南太平洋の原住民と強制的に交配させて、やる気がない、無害な民族につくり替える計画をたてたい」と、語ったことが記録されている。

ニユーロンベルク法より苛酷な黒人差別

私は一九五〇年代末にアメリカに留学したが、黒人に対する差別はひどいものだった。黒人もアメリカ国民であるはずなのに、選挙権も奪われ、教会、学校、ホテル、レストランから、バス、列車、待合室、公衆便所から水飲み場まで、白人用と黒人用に厳しく分

けられていた。黒人は南部で、白人によってしばしば私刑リンチを加えられて、惨殺された。

黒人の血が、八分の一以上混じっていれば、法的に黒人として、定義された。これはナチスがユダヤ人を迫害するのに当たって、ユダヤ人の血が五分の一以上の者をユダヤ人として定めた、ニユーロンベルク法よりも、苛酷なものだった。

日本が先の大戦を戦ったことによって、アジアが西洋の支配から解放され、その高波がアフリカ大陸も洗って、アフリカ諸民族がつきつきと独立を獲得していても、アメリカは国内で黒人に対する、差別を続けていた。

ところが、アフリカの外交官がアメリカに赴任してくると、ホテルや、レストランで差別することが、許されなかった。

すると、アメリカの黒人が目覚めた。一九六〇年代に入ると、マーチン・ルーサー・キング牧師が率いる公民権運動が起って、黒人が不当な差別から、解放放たれるようになった。

それまで、多くの州において、白人と黒人のあいだの性交渉と、結婚を犯罪としていたが、一九六七（昭和四十二）年になって、ようやく最後の三つの州において、撤廃された。大戦後、アメリカのメジャーリーグで、黒人がはじめてプレイできるようになった。そ

れまではゴルフのキャディでしかなかった黒人が、七〇年代に入ってから、白人にまじってプレイできるようになった。テニスを楽しむことも、できるようになった。

タイガー・ウッズがアメリカでヒーローとなり、テニス界でウィリアムズ姉妹が活躍しているのも、日本のおかげである。

もし、日本が先の大戦を戦わなかったとすれば、黒人のオバマ大統領が誕生することは、なかった。いまでも、アメリカの黒人が酷い差別を蒙っていたことは、いうまでもない。

差別主義的なアメリカが民主主義国といえるか

アメリカは、先の大戦が民主主義のアメリカと、軍国主義の日本の戦いだったと、宣伝してきた。しかし、同じアメリカ人であった黒人の人権を踏み躪っていた国が、民主主義国だったといえるだろうか。

アメリカで多くの黒人が、白人にまじって活躍できるようになったのは、先の大戦で生命を捧げた日本の将兵と、戦火に斃れた日本国民によって、贖われたものである。

日系人も、アメリカで試練に耐えた。

私は、仕事で日本とアメリカを往復するようになってから、時間があれば、日系人の老

人ホームを訪れて、寸志や、携えてきた土産を置いて、ねぎら労って喜ばれた。

一九七六（昭和五十一）年に、私がワシントンを訪れたところ、ホワイトハウスから連絡があつて、フォード大統領が先の大戦中に日系人を強制収容所に送った、大統領行政命令を無効にする、新しい大統領令に調印することになったからと、式典に招待された。

ホワイトハウスにおいて行われた式典では、日系の上下院議員をはじめ、二十人あまりの日系人のリーダーが、大統領が署名するまわりを囲んだ。なかで、私だけが日本人だった。そこで、遠慮して、入口にもっとも近いところに立った。

式典後の茶会で、私は「戦後、アメリカ国民が日本に敬意を払うようになったのは、私たち日本の力ではけっしてなく、日系アメリカ人の血の滲むような努力があったからだ」といって、感謝した。